

たぶん

でも

きっと。

小島 澪子

たぶん、でも、きっと

1.

「幸せそうですねえ」

柴田祐太が、ぽつりとつぶやいた。

北島美和は大口を開けて、頂き物のシュークリームにかぶりつくところだったのを取り止めて、隣の席を振り返った。

「私に言った？」

「はい」

「柴田くんも食べる？」

「いや、そういう意味じゃなく」

美和がシュークリームを二つに割ろうとしたので、柴田はあわてて手を振って訂正する。

「北島さんって、食べてる時が一番幸せ、って顔するなあと思って」

「ええー？ そうかなあ」

それってどうとらえたらいいんだろう。

美和は複雑な心境で手元のシュークリームを見下ろした。

「そんなもん食ってると太るよ」

通りすがりざまに部長の中川がニヤニヤ笑って忠告していった。

「はい。ご忠告ありがとうございます」

カロリーも気にならないわけではなかったが、目の前の誘惑にはかなわない。

「いただきまーす」美和は思い切ってシュークリームにかぶりつく。

やわらかなクリームがとろんと口の中にこぼれ出して、自然と頬が緩んでしまう。隣で柴田がにっこり笑って、鳴り出した電話に手を伸ばした。

たぶん、でも、きっと。1-2

食べている時が一番幸せ、か。それはたぶん正しい。他に何か楽しみがあるだろうか。

とは思うものの、最近鏡に映る自分を覗く度、顔の輪郭が次第に丸みを帯びるように見えて、罪悪感にも似た自己嫌悪を感じている。

美和が手を洗う横で、同じ営業部の畑中洋子が、鏡に身を乗り出してアイラインを直している。

「気合入ってるね。合コン？」

「あはっ。わかります？」

洋子は上機嫌でバッグからアトマイザーを取り出し、仕上げに膝の裏に吹き付けた。

「今日は期待大なんですよ。友だちが弁護士と実業家を集めてくれたんです」

「へー」

「今日こそなんとかゲットしないと。じゃあお疲れ様で一す」

「頑張ってねー」

きっとコートを羽織って、洋子はフルーティな風とともに出て行った。

アナスイのスイドリームス。美和も、就職して何年かしてから初めて自分で買った香水で、それ以来長い間愛用していた。いつからかトロピカルフルーツのような甘さが合わなくなり、ここ数年は使っていない。

「いやー。気合の入り方が違うわ」

美和は一人つぶやき、エアータオルの温風に手をかざしながら、洋子の細いウエストを思い出す。思わず自分の腰に手を当てた。そういえば最近服がきつくなったような？

「これは危険信号……」

しばらく甘いものと決別することに決めた。一番の課題は、その決意を持続できるかどうかだ。

あと一通急ぎのメールを送信したら帰ろうと決めて席に戻った美和に、柴田が難しい顔をして相談をもちかけた。

「北島さん、パワーポイントにエクセルの表をコピーして貼り付けると途中で切れたり見た目が変わっちゃうんですけど、このままうまく貼り付ける方法ってないですか」

「そういう時はね、まずここからここまでコピーするでしょ。それで一度パワーポイントに図として貼り付けて、それから残りの列をコピーして……」

美和は柴田のノートパソコンのマウスに手を伸ばして、実演してみせる。柴田は真剣な目で食い入るように画面を見つめた。

「あとは、この二つを動かしてくっつける、と。OK？」

「おおー、スゴイ。そういう風にするんですねえ」

柴田はいたく感心し、ありがとうございます、と美和に深々と頭を下げて賞賛の眼差しを向けた。大したことじゃないのでかえって照れくさくて、首筋がくすぐったくなる。

そこへ、向かいの席で営業二課課長の井上(いのうえ)が眉間に皺を寄せて画面を見つめながら、美和に訊いた。

「北島さん、畑中さんはどこ？」

「帰りましたよ」

「帰ったあ？ どうすんだよ、これー」井上は両手で髪をかき乱して、頭を抱え込んだ。

「どうしたんですか？」

「畑中さんに売上データを頼んだんだけど、社名も製品名もコードのまま集計できないんだ」

「あー」

販売管理システムからダウンロードした売上データは、顧客や製品が管理コードで表現されるので、管理コードマスターと照合してある程度手を加えておかなければ使い物にならない。営業の男性たちはこういったデータの加工は営業事務担当の女性にまかせきりなので、大抵その方法を知らない。それを知ってか知らずか、畑中洋子は、データを出して、と言われた言葉をそのまま鵜呑みにしてシステムから取り出したままのファイルを井上に渡したらしい。

定時で上がるためにとにかく出すだけ出せばいいと思ったのかも、と美和はちらりと考える。洋子にはそんな要領のよすぎるところがある。明日井上がこのことを注意したら、気付かなかった、とか、言われなかったから、と平然と答えられるだけの度胸もある。

悪い人じゃないんだけど。美和はちらっと壁の時計に目をやった。

六時三〇分。たぶんコードの変換だけでは済まないだろうが二時間もあれば終わるだろう。

「私、やりましょうか」

「やってくれると助かるけど、時間大丈夫？」

「いいですよ。今日は別に予定ないし」

美和がためらいもなくうなずくと、井上はほっとした表情を浮かべ、それから申し訳なさそうに言った。

「そう？ 悪いね。明日の朝、本部長に報告しなきゃいけないんだ」

「どういう資料にすればいいんですか？」

「この取引先のデータだけ抜き出して、会社別の今年度の月別実績と明細の一覧を作りたいんだけど」

「じゃあ、毎月の実績の方はグラフにして、その下に明細を表にしておけばいいですね」

「そうだね。それで頼むよ」

「はい」

美和は井上から取引先社名の一覧表を受け取り、すばやく席に戻って頭の中で段取りを考えながら机の上の瓶の中から飴玉を一つつまんで口に放った。

井上から感謝の言葉をもらって美和が会社を出たのは、九時過ぎだった。

「北島さんって、お人よしですよ」一緒に会社を出た柴田が呆れたように言う。

「なんで？」

「だって畑中さんがやってた仕事だし、北島さんがやることないのに」

「そうは言っても、あの場合仕方ないでしょ」

「けど、なんか納得いかないです」

柴田は不服そうに口をとがらせ拳にぐっと力を入れた。

入社三年目の柴田は根が正直で真面目な正義漢である。美和が今日のような残業をするのが一度や二度ではないことを知っていて腹を立てているらしい。

美和は、柴田こそなんの関係もないのに、とおかしくて笑った。

「何かおかしいんですか」

「なんで柴田くんが怒るのかと思って」

「理不尽っていうか、不公平っていうか、なんかおかしいですよ。人のやり残した仕事で残業したりして、なんで我慢してるんですか」

「熱いね、柴田くん。世の中理不尽なことだらけなんだよ。ままならないのが人生です」

美和が歌うような調子で先輩ぶって言ってみると、柴田は顔をしかめた。

「北島さん、ぼくのこと子ども扱いしてません？」

「そんなことないよ。ただ私の方がちょっとだけ長く生きてるからさ」

柴田は不満げに黙ったが、駅前のラーメン屋の明かりを見つけると目を輝かせた。

「北島さん、飯食っていきませんか？」

「うーん。これから帰っても十時過ぎるもんねえ」

「行きましょう」

「行っちゃおうか」

柴田がそそくさと前に立って扉を勢いよく開けると「いらっしやい！」とこの時間に不釣り合いなほど威勢のよい店主の声が二人を迎え入れた。

たぶん、でも、きっと。

<http://p.booklog.jp/book/63431>

著者：小島滯子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kira2life/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63431>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63431>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

2.

三峰電子工業株式会社は制御、計測機器の開発、製造販売を行っている。それほど規模は大きくないが高い技術力と高品質を売りに、不況下でも一定の業績を保っている。

美和は四年前に勤めていた自動車メーカーを辞め、転職活動中にインターネットの求人情報でこの会社の営業事務の仕事を見つけた。

社外から仕事を集めて帰ってくる営業部員たちから依頼される見積書や月々の請求書の作成と送付、在庫確認と顧客への納期回答、発注から納品までの調整、データ集計、プレゼンテーションの資料の作成などが主な仕事だ。営業部の営業事務の女性は美和を入れて三人いるが、営業部員は十五人いるのでやることは際限なくある。残業は多いが、今のところ楽しんで働いている。人間関係も良好で、居心地もよい。これといった目的もなく他の仕事も見てみたいと思いつきで会社を辞めた割に運が良かったと美和は思っている。

午後の仕事が一段落つき、外回りに出た人たちが戻る前に、美和は七階の休憩室で休憩をとった。自動販売機で買った熱いココアを時折喉に流し込みながら、窓に向かって座りぼんやり空を眺める。

小さな雲が、よく晴れた二月の青空をのんびり横切っていく。

私も、あの雲のように流されているだけだ。この先どこに行くのか、どう形を変えるのか、何も知らないし、想像もつかない。

東京本社のオフィスは浜松町の駅から徒歩三分のビルにあり、六階が企画開発・営業部門とシステム開発部門、七階が人事や総務などの管理部門のフロアとなっている。

美和は休憩時間や仕事が煮詰まった時にはこの休憩室に出向く。一フロア上がるだけで、目の前に連なるビル群でジグザグに切り取られた空が広くなりわずかだが海が見える。フロアが違うので、通りがかりの営業部員に見つかり新たな仕事を頼まれるなどして邪魔されることがないのも都合がよい。

昨日、自動車免許の更新時期を知らせるハガキが届いていた。三月で美和は三十歳になる。ハガキを見て初めてそのことに気付き、驚いた。この現実にも思考も感覚も追いついていない。

二十歳を過ぎても大人の実感がなかったのと同じように三十を目前にしても未だに大人になったという自覚がまったくといていいほどない。二十九が三十になったところで何も違いはしないと思う一方で、三十という数字を聞くと確かに時間だけは確実に過ぎてしていると気付いて、ここまで何も考えてこなかった自分の迂闊さを思い知る。

そもそもこんな風に三十歳を迎えることになるなんて、子どもの頃はもちろん、実のところつい最近まで考えもしなかった。ずっと先のことのように思っていたのに案外簡単に辿り着いてしまった、という感じだ。老後とか人生設計とか、そんな言葉が急に現実めいてきて、途方に暮れてしまう。いい加減真面目に先のことを考えなくては、と思う。

「わざわざこっちに来て休憩するなんて、何か嫌なことでもあったんですか」

断りもなく隣の椅子に腰かけて顔を覗き込まれ、ドキリとして振り返ると、柴田の人なつこい笑顔があった。ぺこんとへこむ左のエクボに愛嬌があって実際の年齢よりぐっと下に見える。

「あれ、お帰りなさい」

「ただいま戻りました」

「柴田くんこそ、どうしたの？」

「総務に書類を提出して、通りがかったら北島さんが見えたから」

「そう。私、こっちの休憩室の方が好きなの。いつも壁ばかり見てるから、たまには広いところが見たくなって。ここは空も海も見えるから」

「へえ。たしかにそうですね」

柴田は美和の言葉に納得して、窓の向こうを覗き込んだ。

美和ももう一度海と空の境界にさっきの雲を探した。風に押し流されたのか、形を変えたのか、いつの間にか見えなくなってしまっていた。

「さて。仕事に戻るか。柴田くん、なんか嬉しそうだね。いいことあった？」

「はい。正光製薬に出していた企画が通りそうなんです」

美和と一緒に立ち上がって階段に向かいながら、柴田は強くうなずいて胸を張った。

「あ、パッケージの高速カウンタ？」

「はい。ちょうど新製品の製造がはじまるんで、試験導入してみようって話になりました」

「へえ。頑張ってたもんね。よかったね」

柴田の上司に報告するような誇らしげな口ぶりがおかしかったが、それだけ嬉しくて誰かに言いたくてたまらないのだろうと美和はにこにこしてうなずいた。

「それで、何通りか見積りと効果予測を出すんですけど、エクセルの関数とグラフでうまくできないところがあるんですよ。ちょっと見ていただけますか」

「私にお手伝いできることであれば、何なりと」

「いつもお世話になります。今度ちゃんとお礼します」

「いいよー。それが仕事なんだから」

「いや、食事くらいおごらせてください」

後ろから階段を下りながら義理堅く言い張る柴田に、一足先に最後の一段を軽やかに飛び降りた美和が振り返った。

「じゃあ、納品が決まったらお祝いということでごちそうになります」
柴田はニッコリ笑って、ハイ、と大きく一つうなずいた。

3.

二月最後の日曜日は、従妹の春美の結婚式だった。

まだ子どもだと思っていた五つ下の春美が妊娠五ヶ月での『できちゃった結婚』である。人生何が起こるかわからないものだ。

夫となる男性に寄添って、けれど自分の足で赤い絨毯を踏みしめて毅然と歩く春美は、もはや転んで立ち上がることもせずに泣きじゃくっていた小さな女の子ではなかった。末っ子で甘えん坊の春美でさえ共に生きる相手と守るべき命を得ることでこんなにも強くなれるのだ。

美和は姉のような気分でまぶしくその姿を見上げて拍手で祝福した。花嫁の華やかな晴れ姿と輝く笑顔にはその空間を幸福な空気で満たす力がある。人の幸せを自分のことのように心からうれしいと素直に感じられた。

「ママ、プリンセスだよ」

美和の向かいに座った小さな女の子が興奮気味に若い母親の袖を引っ張って囁いた。

それを聞いた周囲の大人が笑いさざめく。淡いピンクのシフォンのドレスに同じ色の薔薇の花を髪に飾った春美は、確かに彼女の言うとおりでどこかの国の王女のようにだった。

「菜摘ちゃん、大きくなったら何になりたいの？」

「およめさんになる」

「そうかー。そうだよねえ。楽しみだね」

その様子を微笑ましく見守りながら、春美にも自分にも確実にこんな年の女の子だったことがあったのだ、ということに思い至る。あの頃は大きくなったら何になろうと考えていたのだろう。本当に大きくなった今となってはまったく思い出せない。

少し離れた席にいる両親に目を向けた。

同じように花嫁を祝福しながら、その姿に一人娘を重ねて見ているであろう両親のどこか淋し気な横顔を見ると、申し訳ないような気持ちになるのだが、こればかりはどうにもならない。菜摘のように『になりたい』と言ってなれるものでもない。

たぶん、でも、きっと。3-2

同じ都内に住んでいながら両親と会うのも久しぶりだったので、披露宴が終わった後、家族三人で会場近くの喫茶店に立ち寄った。

「元気にしてるのか」

父に訊かれることはいつも同じだ。娘に対して他に何を話していいのか、きっかけがつかめなからなのだろう。その度に美和は、元気だよ、と繰り返す。

「ちょっと痩せたんじゃない？」

母のこの台詞も頻出トップ5の中に入る。残念ながら、言葉どおりに痩せていることは今のところ一度もない。

「太ったくらいだよ」美和は肩をすくめる。これも模範解答。

以前は繰り返されるこれらのフレーズが面倒でまともに応じなかったが、最近は両親が自分を心配する気持ちが少しはわかるようになって、きちんと答えるように努めている。

熱い紅茶の入ったカップを両手で包み込む。披露宴の後、しばらく会場の外で写真を撮ったりするうちに体がすっかり冷えてしまっていた。

「最近どうなの」

「どうって？」

母の質問の真意をわかっていて、わざと訊き返す。紅茶に目を落としたまま顔を上げようとしていないのが全ての答えだと、尋ねた本人もわかっている。

数年前まではっきりと「早く結婚しなさい。いい人いないの？」と言っていた母も、最近は直接言葉にするのを遠慮するようになった。それでも期待半分、あきらめ半分で一応尋ねるのだ。

ふっと軽いため息を耳にして、美和はようやく顔を上げた。

「仕事はどうだ。忙しいのか」助け舟を出すように父が更に質問をした。

「うん。ぼちぼち。なんとかやってる」

「今の仕事は続けられそうなのか」

「うん」

会社に忠誠を誓って尽くしてきた父たちの世代には、美和のように簡単に転職をするということは信じがたいものようだ。父はいまだに美和が突然会社を辞めやしないかと恐れている。

「あと二年だからな」

父がぼそりとつぶやいた言葉の意味がわからず首を傾げると、母が補足した。

「あと二年で定年退職するって話よ」

「ああ、そういうこと」

「お母さんもそろそろ仕事やめようと思ってるの」

「退職したら金銭面で助けるのは難しくなる。無理して結婚しろとは言わないから今の会社に腰を落ち着けて働いていくことだな」

「お父さんもお母さんも、美和に幸せになってほしい。それだけなのよ」

家を出て一人暮らしをはじめた時も、次の仕事の目処も立たないまま会社を辞めた時も、心の

どこかで実家の両親を常にあてにしていたような気がする。どうにもならなかったら戻ればいい、という気持ちがまったくなかったとは言い切れない。

それは父も母も働いて自分で稼いでいるからで、自分が両親の面倒を見る日がくることをまだ遠い先の未来と思い込んでいた。子どもの時から父は会社で働くものと思い込んでいた。母も時に愚痴はこぼしながらも郵便局員の仕事が好きなようだった。

二人とも美和にそんな風にあてにされていたことくらいお見通しなのだ。そして美和の行く末を当の本人よりずっと不安に思っている。

そう思うとひどく心苦しく感じて、美和は胸のつかえを流すように紅茶を飲み込んだ。

自分が年を重ねると同じスピードで、両親も年老いているのだ。当たり前なことなのになぜ考えてみなかったのだろう、と自分の愚かしさに呆れながら、テーブルに置かれた二人の年季の入った手を見る。

4.

敦子と千枝との待ち合わせは大抵新宿の【キャラバン】に決まっている。食事やドリンクの種類が豊富で、味にうるさく特にデザート重視の三人が全員一致で好きな店の一つである。

三人は高校で同じクラスになって以来の付き合いだ。性格も趣味も違い、卒業後はまったく別の道を選んだが、不思議と気が合い、今でもこうして時折一緒に食事を楽しんでいる。

美和は先日の結婚式で同席した幼い女の子の話をした。

「それでふと思ったの。本気で『お嫁さんになりたい』って言っても笑ってすまされるのは何歳までなんだろう、って」

「確かに。この年で言ったら確実に引かれるね」

「引く引く」

三人は同時にその状況を想像して吹き出した。

「高校の時は美和が一番結婚したがってたよね」と敦子が過去の話を持ち起こせば、千枝も大きく首を揺らしてうなづく。

「そうそう。そうだよ。早いうちに結婚して若いお母さんになりたい、って言った」

「あの頃の計画では、大学を卒業したら結婚して、子どもを生んで、近所の奥さんを家に招いてお茶して、とか優雅な生活をするはずだったんだけど」

「無理無理。今時専業主婦をさせてくれるような甲斐性のあるダンナは見つからないよ」

「その計画はどこで狂っちゃったの？」

敦子の問い掛けに、美和は肩をすくめて答える。

「結婚には相手が必要だってことに気付いていなかったのがこのプランの最大の失敗要因だったね」

「あっはっは。そう、そこが一番重要」千枝がハスキーヴォイスを響かせて豪快に笑った。

こうしていると、ランチタイムや放課後に自分たちの将来のことをあれこれ勝手気ままにしやべっていた高校の教室に引き戻されたような錯覚を起こす。控えめで暖かな照明の色が、夕暮れ時の色に似ているからかもしれない。

あの頃、美和は確かに結婚に憧れていた。しかしその一方で、女優になりたいという夢も持っていた。

所属していた演劇部でも端役しかもらえないほど目立たない自分なら、スポットライトを浴びるような主役級の女優は無理でも、脇役を専門とするような女優を目指すことはできるのではないかと半分本気で考えたこともあった。大学でも演劇を続けたが、その四年の間に、役に完璧に入り込むところまで行きつけない自分の限界と演劇の世界で生きることの厳しさを知って、自然にその夢も萎んでしまった。

それに比べて、歌手になると言っていた千枝は披露宴で歌う仕事をしたり、ライブハウスでライブをしたり、その資金を稼ぐために路上で歌ったりしている。好きな英語が使える仕事がしたいと言っていた敦子も、外資系の商社に就職し培ってきた英語力を活かして役員秘書として働い

ている。

「千枝も敦子も、あの頃言ったことをほとんどそのままやってるじゃない。それってすごいと思うんだよね」

美和は本心からそう思って二人を眩しげに見た。

「やめてよ。結婚式場のバイトなんか年に三回くらいしか声がかからないし、会場借りてライブすると逆に赤字だし、結局のところ派遣の事務仕事で食べてるんだから」

と千枝が肩をすくめれば、敦子も嘆息する。

「私も別に、秘書なんかやるつもりじゃなかったよ。上司のワガママに振り回されるし、もっと自分のペースで働きたい」

「ふーん。そっか。いろいろとあるんだね……」

隣の芝生が青く見えるだけなのかもしれない。それでも美和には、流されるままに生きているような自分と比べたら、二人ともしっかり自分の道を選んで先を行っているように思えた。

「まだ入るでしょ？ 追加で何か頼もうよ」

千枝の提案で三人はメニューを開いてウェイターを呼んだ。それぞれが食べたいものを次々に指差していく。

おぼろ豆腐のサラダ。エリンギの塩焼き。ゴーヤチャンプル。生春巻き。高菜チャーハン。

「ストップ。そこまで」最後に敦子が冷静に制して、三人はまた笑った。

メニューを元の場所に戻しながら、ふと美和は考えた。

子どもの頃は、大人になればやりたいことをやりたいようにできるのだろう、と漠然と信じていた。メニューから料理をオーダーするように。もし、人生の選択肢にもメニューがあって本当に選んだとおりに（シーフードピラフを頼んだのにシーフードピザが出てくるといった間違いや思いがけない品切れもなく）生きていけるとしたら、私のメニューには一体何が並んでいるのだろう。

二年前の春、営業部に五年ぶりに新入社員が配属された。学生時代は野球をやっていたというその新入社員は、元気よさと人なつこさで男女を問わず誰からも好かれ、取引先でもかわいがられた。

美和からその新人・柴田祐太のことを聞いた千枝は「小犬ちゃん」と命名し（ユウタ、という名前も犬の名前っぽい、というのが千枝の主張である）、顔を合わせる度に、小犬ちゃんは元気？ と訊くようになった。体育会系出身らしく声がやたらと大きくはきはきして愛嬌のある柴田は確かに「小犬ちゃん」にぴったりだったが、その小犬ちゃんが今日はすっかり元気をなくして背を丸くしている。

それもそのはずで、今朝彼の担当得意先の高津電機から、昨日納品された製品が注文より十個足りなかった、とクレームの電話があったのだ。千葉の倉庫や埼玉の工場から不足分をかき集めて客の下へすっ飛んでいった柴田がオフィスに戻ったのは午後四時を過ぎた頃だった。

うつむき加減の柴田のことが気になって、美和は在庫確認画面で同じ品番を三度も検索し直してしまった。

柴田と一緒に高津電機に頭を下げに行った井上が中川に報告する声に耳をそばだてた結果、高津電機から数の変更依頼があった時に勘違いをして来週納入予定の発注書に追加分として記入してしまったことから発生したトラブルらしいことがわかった。

高津電機の発注担当の女性とは美和も何度か電話で話をし、実際に注文を受けたことがある。間違いのないようにFAXやメールでの発注を頼んでいるのに、いつも電話をしてくる。数や納品日の変更も多い。ミスが発生するのも無理はない、と美和は柴田に同情した。

柴田が客からクレームを受けたのは美和の知る限りこれが初めてだ。彼の元気な声がしないと周囲も火が消えたように暗く沈んでいる。誰もが電話に応じる自分の声をやたらに大きく感じて思わずトーンダウンしてしまうほどだ。

美和は机の上の瓶からレモンキャンディを二つつまんで、柴田の机の上に差し出した。

頭を抱えるようにして、トラブル報告書という嫌な名前の黄色い書類に事の顛末と今後の対策を記入していた柴田が顔を上げた。

「元気の出る飴。効き目は実証済みだから試してみて」

美和は重大な秘密を打明けるように声をひそめて説明し、発注伝票のコピーをとるために立ち上がった。

幼い頃、頻繁に腹痛を訴える美和に、母は白くて甘い錠剤を与えた。死ぬんじゃないかと思うくらいにつらい痛みでも、それを飲むとたちどころに消えたものだ。

人前で一人でスピーチをすとか、大事な試験の時など、極度の緊張により心因性の腹痛が起きるのだと自分でわかる年になってから、母は美和に笑いながら白状した。

「あれはただのラムネよ」

美和が長いこと魔法の薬と呼び劇的効果をもたらした秘薬の正体は、ラベルをはがしたジャムの空き瓶にラムネを詰めたものだったのだ。

そうとわかってからも美和は演劇部の舞台の本番前や試験の日、恋の一大局面でラムネを飲み続けたが、就職してからそれはレモンキャンディに変わった。

しかも自由が丘のある雑貨店に売っているオリジナルのキャンディに限り、代用では効き目がない。だから会社にも家にも買い置きをして切らすことのないようにしている。

最も、腹痛を起こすような非常事態が訪れることは最近では滅多になく、嫌なことがあった時やイライラした時、気分を切り替える時に口に放っている。

実際にはそんな効果を持つ成分が入っていないと知っていても効き目は得られるのだから、信じる者は救われる。

天気予報によれば、この冬一番の寒さらしい。寒いのは苦手だ。朝、布団から離れるのがつらい。出社拒否したくなる。

駅の階段を下りる時、風が頬を切りつけた。思わず体を縮める。

夜は雪が降るらしい。家に帰った後に降るのならいいけど、などと自分本位に考えながら空を見上げた。

それがいけなかった。

がくんと、視界がまったく不意に切り替わった。階段がもう一段続いていたのに気付かず、踏み外したのである。

「いったあー」

咄嗟に突いた両手がじんと痺れる。膝もじわりと痛みはじめた。同じ会社の社員も他の職場に向かう人も大勢通りかかる。恥ずかしすぎて顔も上げられず、自己嫌悪に陥る。

「大丈夫ですか」目の前に、大きな手が現われた。

顔を上げると、柴田がにこにこしながら手を差し伸べていた。

「あはは、見られた。ヤダ、もう」

照れ隠しに笑いながら彼の掌に手を載せると、予想を超えた強い力で一気に引き上げられて、美和はあわてて足に力を入れて踏みとどまった。

「男の子だ。力あるね。ありがとう」

「何言ってるんですか」

美和のおかしな感想に柴田は目を丸くして、それからくすりと笑った。

「北島さんって、意外と抜けてますね」

「そうだね。否定できません」肩を並べて歩き出しながら、美和は苦笑した。

不思議と柴田にそんな風に笑われても恥ずかしいとか腹が立つとか負の感情は湧いてこなかった。むしろあの場にいたのが柴田でよかったとさえ思える。

「昨日はどうもありがとうございました」

角を曲がってオフィスビルの入り口が見えて来た時、柴田が唐突に頭を下げたので、美和は首を傾げた。

元気の出る飴、と柴田がぺこんとエクボを見せて、説明を加える。

「ああ、あれ。どう、効き目あった？」

「はい。お陰様で」

確かに今朝の彼はスッキリした顔をしていて、昨日の失敗のことはすっかり吹っ切ったように見えた。今日はいつもの元気な仕事ぶりが見られることだろう。美和も嬉しくなって、ニッコリ笑った。

請求書十枚をいかに早く、正確に作るか。

美和は時々、自己ベスト更新に挑戦する。これまでの最高記録は、九分十秒。九分を切るのが目下の目標だ。

プリントアウトした請求書をチェックする。最後の一枚。これが合っていればクリアだ。請求金額、一七五三一五円也。OK、間違いなし。

タイムは？ 腕の時計に目を走らせる。五時十八分、五秒。……九分五秒、か。まず五秒縮めた。

「よし」思わず握り拳に力を込める。

「何かいいことでもあったの？」

美和宛の郵便物を届けに来た大野依子が首を傾げた。

「えーと。いえ。なんでもありません」あわてて首を振る。

「でもなんだかすごく嬉しそう」

「ちょっと請求書作るのがうまくいったから」

ありがとうございます、と郵便物を受け取りながら、美和は赤面した。請求書作成のタイムトライアルをしていることなどばかばかしすぎてとても言えない。

「そんなに楽しそうに請求書を作る人、初めて見た」

「えー。そんなに楽しそうに見えます？」

「うん。見える」

依子はふっくらした頬に柔らかな笑みを浮かべて、おっとりとうなずいた。

依子は、営業事務の三人の中で唯一の既婚者で、働く母親である。新入社員の頃からこの会社で働いて、経理部の課長と社内恋愛の末に結婚したと聞いている。かなりのベテラン社員だ。

依子の笑顔の方が幸せそうで楽しい気分させられるのに、と美和は首を傾げる。

「北島さんって、悩みなさそうだよなー」

突然向かいの井上が話に入ってきて、ため息混じりに言う。

「いつも楽しそうでうらやましいよ」

「えー。それってなんかただのバカみたいじゃないですか」

「そうは言ってないよ」

「ふふ。井上さんは特別悩みが多いのよ。家のローンのこととか、子どもの教育費のこととか、売り上げの数字のこととか」

井上の言葉に戸惑う美和の背中をぽんとやさしく叩いて、依子は笑った。

「私も美和ちゃんみたいに楽しく仕事して六時に帰ろうっと」

悩みがない、ねえ……。

そりゃあ、ゴハンも喉を通らないとか、毎晩眠れないとか、そんなディープな悩み事はないけど、何も考えてないわけじゃない。私にもいろいろあるんです。

バッグから携帯電話を取り出し、着信履歴を見る。

サカイマサト。

台風のような名前。忘れた頃に突然訪れて、心の中を散らかすだけ散らかして、去っていく。通りに面したウィンドウから中を覗くと、いつもと同じ席に雅人の横顔があった。付き合っていた時にもこうしてこの店で待ち合わせをした。

期待するなよ、と自らに釘をさして、美和は扉を押して中に入った。

「悪いね、急に呼び出して」美和が席に着くと、雅人は屈託なく笑った。

「急じゃなかったことがあったっけ？」

肩をすくめて、美和はウェイターの差し出すおしぼりを手にとりカンパリオレンジを注文した。

転職して大阪に行ったのだって、別れを切り出したのだって、いつも晴天の霹靂だったではないか。

「元気そうで何より。ますますキレイになって」

「思ってもないこと言わないでって言ってるでしょ」

「ホントだよ。職場には四十のおばさんしかいないし」

「やな感じ。私だってあと少しで三十だし、自分だってもう三十三じゃん」

「まあね」

雅人はタバコに火をつけてニヤニヤしながら煙を吐いた。

思ってもないこと言わないで。今まで何度この言葉を口にしたらろう。

『結婚したいね』

あの頃、彼は毎日のようにそう言った。その場の勢いで言っているだけだと笑いながら、本当は少しだけ信じたいと思っていた。その先の未来を。

「ちょっと早いけど、誕生日おめでとう」

「ありがとう」

形式的にグラスをぶつけて、アルコールを喉に流し込む。空腹のせいですぐに酔ってしまいそうだ。アルコールでストッパーがはずれるのだけは避けなくてはいけない。

美和はウェイターを呼び止めてペンネ・アラビアータを追加で頼んだ。

「相変わらず食べるね」

「お腹空いたの。大体、食べ物無しでお酒だけ呑むなんて体に良くないし、太るよ。なんかちょっとお腹出てない？」

「やっぱり？ まずいな」

「まずいよ。ビールっ腹なんて、おじさんっぽーい」

「うるせえよ」雅人は舌打ちをして、煙草の煙を吐いた。

煙草の煙が美和に向かわないように顔を背けて吐き出すその横顔が好きだったこともあった。今ではそんな仕草を見ても心を動かされない。それなのに、なぜ呼び出されたら応じてしまうのだろう。

「ところでどう、彼氏できた？」

「……ほっといて」

彼氏がいたら呼び出されても来ないことを知っているくせに。美和は灰皿の中で煙草の火を消す相手の指先をにらみつけた。

雅人は異性と付き合うのは面倒だと考えている。自分の自由が奪われることも、何かに責任を負うことも嫌いなのだ。そのくせ、淋しくなると美和を呼び出して食事や酒に付き合わせる。それを知っていて都合のいい女になっている自分にも腹が立つ。

「まあ、選択肢としておれも残しておいてよ」雅人はそう言ってジョッキを空けた。

美和は答えない。この男はどこまでずるいのだろう。こうやっていつまでも私を縛り付けられるものと思っているのだ。会えばこうしてストレスを感じるだけなのに、同じ事を繰り返しているのがばかばかしい。

本当に、何もかも中途半端だ。この先の道がまっすぐなのか曲がっているのか、暗いのか明るいのか、上り坂なのか下り坂なのか、それすらもわからないで歩いている、そんな感じだ。しかも自分でどこに向かうのかも決めていない。

いらだつ気分をどこにぶつけていいのかもわからず、美和はまた一口グラスの紅い液体を口にしました。

苦い。今日はカンパリオレンジの気分じゃなかった。

こんな選択一つ間違えるようじゃダメだな、と美和は舌を軽く噛んだ。

客が帰った後は、祭りの後にも似た脱力感に襲われる。

土曜の夜に泊まりに来た千枝を駅まで送って、ドラッグストアでトイレットペーパーや洗剤を買って部屋に戻ると、コーヒーの茶色い跡の残った二人分のマグカップとパンくずが残った木のトレイがテーブルの上で片付けられるのをじっと待っていた。

好きな男性であれ友人であれ、自分以外の誰かがいた余韻の残るからっぽの部屋にいと、過ぎ去った時間が楽しければ楽しいほど、ぽっかり穴の開いたような欠落を感じる。

ベッドの上に放り出されたままのDVDのパッケージも昨夜の名残だ。

昨夜、思い切りハッピーなDVDを見たい、という千枝のリクエストで、《ラブ・アクチュアリー》を選んで見せたのだが、千枝も一年前に彼氏と別れて以来浮いた話から遠ざかっているため、どうやら結果的に孤独感を高めるだけだったようだ。

エンドロールを見ながらつぶやいた千枝の第一声は、「私も幸せになりたーい」だった。

「人生で女として一番キレイな時期に一人でいるなんてもったいないよねえ」

「ホントにね。どうしたものか」美和も実感を込めてうなずいた。

鏡を覗いて肌の調子がいい時ほど、もったいないと思う。シミやシワに悩まされる前に、できるならもう一度恋したい。

「美和はいいじゃん。小犬ちゃんがいるから」

「四つも下だよ？ たぶん私なんかそういう対象に見られないんじゃない」

「中学生じゃあるまいし年なんか関係ないって。美和はいつも余計なこと考えすぎだよ。大人の魅力でなんとかしなよ」

「大人の魅力ねえ……」美和は首をかしげた。

色気という点ではまったく自信がない。それでは大人の魅力もあつたものではない。

「このままずっと一人なのかなあ。不安じゃない？」

投げ出した足を胸元に引き寄せて小さくなり、千枝は美和の肩に頭を載せた。

「不安だよ。ずーっと頑張って一人で働いてご飯食べてくって、覚悟してなかったから」

時々、無性に生きることが辛いと思うことがある。

例えば夕食のメニューを考える日曜の夕方。例えば夜遅くまで働いて帰りついた部屋の電気のスイッチを指で探る時。自己嫌悪や後悔を抱えて布団に入った夜。

それは、世の中の人がきっと誰かと一緒に共有しているであろう時間を一人で過していることに気付いた瞬間を狙って襲ってくる。この先ずっとこのまま一人で生きていくと考えると、人生が途方もなく長いものに思えて暗い気持ちになる。雑誌をめくってみたり、マニキュアを塗り替えたり、靴を磨いたり、無心になれることを探して、耐える。この発作はひとしきり心臓をぐりぐりえぐった挙句、何一つ答えも見出せないまま、何事もなかったかのように去っていくのだ。

その後二人は近所のカラオケで朝まで歌い、心に押しえ込んだ全てのストレスを吐き出してきた。お陰で二人共昼過ぎまで死んだように眠り続けることになったのだが。

美和はセーターの袖をまくってテーブルの上のトレイとマグカップをキッチンに運び、後片付

けをはじめ。

「なくしーちゃーいけないものもー。今なーら、もうわかーるの」

スポンジに洗剤をたらして泡立てながら、カラオケで必ず千枝が歌う歌を口ずさんだ。

ようやく暖かくなってきたから路上ライブを再開する、と千枝は目をきらきらさせて力強く言っていた。

「プロになるとかならないとかじゃなくて、ただ単純に歌いたって思うから」

美和はきっと千枝の歌を聴きに行く。歌が好き、好きなことをやっているんだ、という想いの込められた千枝の歌が好きだ。それを聴くと自分も頑張ろうと励まされるから。

(歌詞: "GO TO THE TOP" 作詞 hitomi)

小学校一年の時、学芸会で《おやゆび姫》の主演をもらった。当時一番背の低かった美和がおやゆび姫であれば他の役は誰がやっても大きく見えるというだけの理由だっただろうが、そんな大役は後にも先にもこの時限りだった。今ではその時の舞台が成功したのか、どんな台詞を言ったのかも覚えていないが、その後美和が演劇に興味を持ったのはそれがきっかけだった。

女優になりたいという夢は失っても、朝の自分は間違いなく女優だと思う。特に、月曜日の朝は。

美和はエレベータの中で静かに深く息を吸い込んだ。かつて暗い舞台裏で出番を待つ間に深呼吸したのと同じように。どんなに憂鬱でも、やる気のかけらも見出せないだるい気分の日でも、オフィスに入る扉を開ける瞬間に気持ちを切り替える。

今日も一日楽しく働こう。

その瞬間は劇中初めてステージに飛び出す時と同じ気分だ。

「おはようございます」

机の下にバッグを置いてPCの電源を入れると、先に出社していた柴田が顔を上げて、「おはようございます！」と元気よく答える。

最初の頃はその大きな声に毎回驚かされたものだが、今ではすっかり慣れて、外出などで彼がいない時には物足りないような気にさえなる。彼の声から受ける波動で胸の中に押し込めたもやもやした気分がすっきり吹き払われるのかもしれない。

その柴田の頭のシルエットがいつもと違うことに、ふと気付いた。

「あ。短くなった」

美和が指をさすと、柴田は照れたように頭の上に手を置いて、変ですか、と訊いた。

最近すっかり伸びた髪に見慣れていたが、新入社員としてやって来た頃はこんな風に短く切りそろえられた髪型で、いかにも野球部員らしかったことを思い出した。

童顔とまではいかないが、顔の骨格に骨ばったところが無い柴田はこの髪型にすると未だに学生で通じそうだ。

「変じゃないよ。若返った感じでいいんじゃない」

本当に子犬のふかふかの毛を思わせる柔らかそうな髪に触れてみたい衝動に駆られて、美和は椅子に腰を下ろしてそっと訊いてみる。

「ね、ね、触ってみていい？」

「えっ。いいですケド」

戸惑いながらも柴田が許可を出したので、美和はそっと手を伸ばして掌でその感触が果たして想像通りなのかどうか確かめた。

毛の先がふわりと掌を押し返す。小さな頃に常に胸に抱えていた兎のぬいぐるみの感触が蘇った。

「わー。おもしろい」

「……学生の頃も先輩たちによくやられました」

苦笑する柴田を更に別の手が襲う。

「おー、柴田。中学戻ったみたいだな」

いつも柴田をからかうのが楽しくてしょうがない、という調子の営業一課の課長の小原が通りすがりざまにわしわしと触っていった。

「やめてくださいよー」

頭を両手で守って柴田が口をとがらせる。その様子に周囲の者がどつと笑った。

「やっぱり失敗ですかねー」

ひとしきり笑われてから、柴田が机の引き出しの開け閉めをしながら、ぼそっと美和に言った。

「そんなことはないよ。ごめんね。私が触ったりしたから」

「いやっ、別にそんなんじゃないですよ」

美和がそっと謝ると、柴田が片手を挙げて美和を責めているわけじゃないと首を振った。

そこへ総務部の伊東里紗がやってきて、柴田に声をかけた。

「おはようございます。柴田さん、こちらの申請書なんですけど、ここに印鑑を押していただけますか」

「おはよう、伊東さん。そっか、ごめん。印鑑探してるうちに押し忘れちゃったんだ」

差し出された書類を見て柴田はあわてて引き出しを開けて印鑑を摘み上げた。

「柴田さん、髪切ったんですね」

「そう。おかしい？」

「いえ、かっこいいですよ」

「ありがとう」

その会話を左耳で聞きながら、美和は柴田の言葉遣いがいつもと違うのに気付いた。敬語ではない、くだけた口調で話すのを聞くのは初めてだ。

考えてみたら営業部では一番下でも、入社三年目だから今年の新入社員は後輩なのだ。いつも先輩たち（それも三十代以上）にかわいがられているところしか見ていないので、奇妙な異和感を覚えた。

「ここ一ヶ所でいい？」

「はい。大丈夫です」

「あと抜けてるとこないよね？」

「はい。ありがとうございました」

「こちらこそわざわざ持ってきてくれてありがとう」

戸棚のファイルを取りに行こうと立ち上がった美和と目が合った里紗は、美和にもニッコリと笑顔を見せ会釈をして行った。

美和も業務上彼女に仕事を依頼することが多いのだが、いつも二つ返事で引き受けてくれてとても感じがいい。それに、線が細くて社内ではトップクラスのきれいな顔立ちをしている。

ちらりと見た柴田と里紗の様子がいい雰囲気だった。少なくとも里紗は柴田に興味がありそうだ。意外といい組合せかも、と美和はテレビの芸能ニュースでも見るように考えた。

また、だ。

美和は点滅を始めた頭上の蛍光灯を見上げた。

一昨年の暮れに換えたきりだった。一ヶ月前から時々点滅をするようになり、交換しなくては、と思いながらそのままにしていた。

膝の上に広げた雑誌を閉じて立ち上がろうとした時、それは点滅すら止めてロウソクの火を吹き消したように消えてしまった。スイッチを押したり紐を引っ張っても、もはや復活することは無かった。

テレビではこのところよく見かける若手のお笑いタレントがおかしなことを言ってスタジオを沸かせていたが、なんとなく心細くて笑う気分にはなれなかった。

外は雨。ごうっと風の吹き荒れる音、雨が窓を叩く音が激しく続いている。今日はもう寝てしまおう、と美和は雑誌を棚に置いて、ベッドに横になった。リモコンでテレビを消してCDをランダムにかける。

aikoの `桜の時、が流れ出す。幸せな、恋の歌。

右手をつないで
優しくつないで
真っ直ぐ前を見て
どんな困難だって
たいした事無いって
言えるように
ゆっくり ゆっくり
時間を超えて
また違う幸せなキスを
するのがあなたであるように
(`桜の時、 作詞 aiko)

私、どのくらい恋をしてないんだろう。ふと、美和は考えた。

雅人と別れた後、二人の男性と付き合った。いい恋だったと思う。でももう一切連絡をとっていない。二人とも既に他の誰かと結婚しているのではないだろうか。その時は確かに好きだったのに、名前と顔を記憶から掘り起こすのに時間がかかるようになった。

最後の恋が終わったのは、二十六の冬。三年も前だ。休閑期が長い。

『北島さんって、意外と抜けてますね』柴田の声と差し出された手が突然よみがえる。

大きくて、力強くて、温かかった。あの手で頬を包まれたらどんな感じなんだろう、と想像しかけて、その突拍子も無い思い付きをあわてて打ち消す。

欲求不満？ 美和は自嘲的に笑って、寝返りを打ち、暗がりに慣れ始めた目で天井を見上げた

。

恋愛をするのが億劫だと思い始めている一方で、男性の腕に抱かれて眠りたい夜はある。セックスがしたいというよりは、誰かの腕の中で眠る安心感が欲しい。大きなものに守られている、というあの安心感は、男性の手の中だけにある気がする。

今の状況に取り立てて不満はない。仕事も、人間関係も、問題はない。むしろ満足すべきだ。決して自分を不幸だとは思わないし、幸運に恵まれていると信じている。それなのに、なぜかいつも何か足りない気がする。恋をしていないというだけでこんな風に物足りない気分になるのは、ただの贅沢というものなのだろう。

大口の取引先の一つである山田食品から七人の見学者が埼玉工場にやってくるというので、美和と洋子も中川、井上以下営業二課のメンバーと一緒に朝から工場に向かった。

工場見学の後、新宿の料亭で懇親会だった。美和と洋子を同行させたのは見学よりも懇親会がメインだからだ。

営業の部署にいればこうした業務は付き物で、以前自動車メーカーで働いていた頃から何度も駆り出されてきたので、それなりにツボは心得ているつもりだ。下ネタが飛び出すことくらいは序の口で、時折大っぴらにセクハラまがいの接触をはかる男性もいて、相手の心証を害すことなくいかにもうまくかわすかが腕の見せ所とも言えた。

この日のメインゲストは、山田食品の製造部門の担当役員である正木だった。山田食品との取引は全て正木にかかっているのだと井上は前日に美和と洋子に説明した。

前半は和やかで、雰囲気もよかった。美和は洋子と二人で正木をはさむ形で座り、正木や山田食品の社員の盃が空けば酌をしたが、一緒に料理を楽しむ余裕はあった。

「北島さんは、どうなの。結婚の予定」

「ないですねえー」

「彼氏はいるんでしょう」

「いやー、それがいないんですよ」

「それなら私にもチャンスはあるかな」

「そうですね」

美和は口では否定せず笑いながらも、父親とそう変わらない世代の正木と付き合うなんて想像もできない、と思う。

正木は彫りの深い顔立ちで、おそらく若い頃は女性に困らなかっただろうと容易に想像できる容姿と知性を備えていた。グレーのスーツとシャツの白に映える赤いネクタイは彼の妻の見立てなのだろうか。なかなかいい趣味をしている。

依子から山田食品の接待には気をつけるように助言があったため、初めは警戒して気を張っていた美和も酔いが回ってきたこともあって、自然に緊張が緩み出す。

話題は井上の子どもの話に移り、美和は相槌を打ちながら、この間に茶碗蒸しを食べようと赤い漆塗りのスプーンを手を取った。個人的に来ることなど決してないような老舗の味である。せっかくだからどの料理もしっかり味わっておきたい。つい、そんな欲も出る。

「子どもはやっぱりかわいいですよ」

「今のうちですよ。そのうちくさいとか近寄るなどか言われるようになるんですよ」

「お子さんは中学生ですか？」

「いえ、幼稚園に入ったばかりです」

「今時は幼稚園児でもそんなことを言うのですか」

「そうですね。つらいものですよ」

がちやん。陶器と陶器のぶつかる大きな音がして、全員が一斉に振り返った。

美和の膳の上で茶碗蒸しの器が横倒しになり、中身が鯛の煮凍りの皿の上に全てこぼれだしていた。

「北島さん……！」

末席でその瞬間を唯一見ていた柴田が血相を変え、膝を立てて腰を浮かしかけた。それを視界にとらえた美和が咄嗟に柴田の目をきつとにらむように制して頭を下げた。

「失礼いたしました。ちょっと酔ったみたいで……」

音を聞きつけた仲居が駆けつけ、てきぱきとその膳を下げて新しいものと交換していく。

「どうもすみません」

服が汚れなかったかどうか気遣ってくれた親切な仲居に頭を下げた後、美和はうつむいたまま、「すぐ戻ります」と早口で言い残して、席を立った。

あれくらいで動揺するなんて、まだ私も甘いのかな……。

美和は重い石を胃の中に投げ込まれたような気分で、シートに体をあずけた。

あの後座敷に戻ると、美和の席に柴田がいて、正木に酌をしたり場を盛り上げるように気を使っていた。おかげで美和は元々柴田のいた席に正木から離れて座ることができた。店を出た後も柴田が正木の視界に入らないようにさりげなく美和の前に立ってくれたので、それ以上不快な思いをせずに済んだ。柴田の行動から薄々事情を察知した井上と中川も、美和に話が及ばないように巧みに話題を繋いでいた。

あの瞬間のことを思い出すだけで何度でも全身が粟立つ。

『この後二人でどこかに行こうか』

正木は低い声で美和の耳に囁き、太腿を撫で上げた。

あの声。耳にかかった息とねちっこい手の感触。かなり老巧なやり口だった。他の人間が話に気をとられている間に、話題から外れた美和を狙ってきたのだ。

おそらく正木は美和をからかったに過ぎないのだろうが、帰りにつけてこられるかもしれないと考えはじめたら一人で帰るのが怖くなった。

「ごめんね、柴田くん。お金は私が払うから」

「そんな、いいですよ。ぼくもなんか酔っちゃったし」

店の前で、正木や山田食品の社員の乗ったタクシーを送り出した後、他の皆はそれぞれ駅の改札に入っていったが、美和は柴田に頼んで一緒にタクシーに乗ってもらった。

新宿から美和の住む学芸大学に行って、そこから浅草橋の柴田の家に向かう。遠回りで奇妙なルートだが距離が稼げるためか、タクシーの運転手に文句は言われなかった。

「大丈夫ですか？」

塞いでいる美和の顔を、柴田が心配そうに覗き込んだ。

「うん。大丈夫。気を使ってくれて、ありがとね」

美和はようやく硬い表情を和らげた。もうここには柴田しかいない、と思うと緊張が解けて肩の力が抜けた。

「柴田くんのおかげで助かったー」

「いや、ぼくなんか何もできなくて申し訳なかったです」

柴田が眉間に皺を寄せて険しい顔を見せながらため息混じりに言った。

「今日ほどこの仕事を嫌だと思ったことないです。なんでこんなやつにペコペコして酒注いだりしなきゃなんないんだ、ってムカついて何度殴りたいと思ったか」

「でも、全然そういうの出さなくて、スマートに対応してたね。営業の鑑だよ」

「あの時北島さんに止められたから。そうじゃなきゃ本当に殴ってたと思う。あの状況でよくあんな判断できましたね」

「わかんない。なんか、無意識にしてたから」

柴田くんを巻き込んではいけないと思った。それだけだ。

「すっげー」

柴田は頭を振ってどっかりシートに背中を押し付けた。

「北島さん、例のものは持ってるんですか」

「例のもの？」

「元気の出る飴」

美和は笑ってうなずき、バッグの中を探った。実はさっき一個食べたんだ、と言いながら、柴田にも一つ手渡す。

「これ、常備薬なんですね」

「うん」

柴田が礼を言って飴を口にするのを見た後、美和も一つ口に入れた。はじめは舌に刺激を与える酸味、それからそれが甘味に変わる。馴染みの味にほっとする。

「柴田くんはきっといい大人になるね」

それを聞いた柴田は身を乗り出し、深刻な顔をして美和を見据えた。

「おれってそんなに子どもっぽいのかなあ？」

美和はあわてて首を振る。

「ごめん、私、自分がいつまでも子どものつもりだからつい言っちゃうんだけど。そうじゃなくて、きっと間違っても柴田くんはあんな路線には走らないだろうなあーと思って」

「あんなん、冗談じゃないっすよ」

「冗談じゃないっすよ」

アルコールが効いているせいなのか、柴田がいつもよりくだけた物言いをするのがおかしくて、思わず口真似をした。

二人で笑い出しながら、美和は心から思った。

柴田くんがいてくれてよかった。

暗い部屋の中で、美和は途方に暮れた。

昨日の今日で部屋の蛍光灯はまだ換えていない。玄関とキッチンの灯りをつけて、それでなんとか用事を済ませたが、実は電気がつかない以外にも大きな問題が発生していた。

家に帰るとキッチンの床に敷いたマットが濡れており、不審に思っで見上げた天井から水が染み出していたのだ。

管理会社の二十四時間対応のメンテナンスサービスに電話をしたが、明日の午前中に作業員を派遣する、と言っただけで、今すぐ解決してくれるわけではなかった。

ぽつ。バケツの底に雫が零れ落ちる音が、不規則に続いている。その音がより一層物悲しさをかき立てる。

舞台上で貧しい家を演出するのにも、今時こんな手は使わないだろう、と精一杯笑える方向に考えようとしてみたが、今はそれほどおかしいと感ずることができなかつた。

お酒を飲んだ後は喉がひどく渇く。ミネラルウォーターのペットボトルを冷蔵庫から出した。ところが、蓋が回らない。

これをどうしたものか。

美和は打ちのめされた気分でキッチンに立ち尽くし、白い小さな蓋をじっと見つめた。元々握力が弱く、ペットボトルの蓋を開けるのが苦手なのだが、今日のボトルは特に頑強で、美和がいくら力を入れてひねってみても身動きする気配がない。

もう一度、と蓋を握ってみたところで、自分がとてつもなく無力な存在と思ひ知らされた気がしてひどく悲しくなつた。涙をこぼしそうになつて、美和はあわててミネラルウォーターを放棄して水道水をコップに注ぎ一息に飲み干した。

こんな小さなことから、そんな風に簡単に、不安に押しつぶされそうになる。

強くありたいと思う。一人でしっかり生きていかなきゃ、と思う。だけど、私にそれができるんだろうか。誰にも頼らずに、どんな時も前を向いて歩いていくことができるんだろうか。正直なところ、自信がもてない。

雨漏りは前日の風雨で樋が壊れたのが原因だったらしい。

中川に事情を話して午後から出社することにした。約束どおり訪れたメンテナンスサービスの作業員が修理をしてくれた。ついでに蛍光灯も自分で交換した。直すところを直したら、少なくとも最悪の気分から脱け出せた気がした。

夕方、七階の休憩室でココアを飲んだ後でトイレに立ち寄ると、そこで鏡に向かう里紗に会った。

「こんにちは、北島さん」

相変わらず感じのいい挨拶をされて、美和も、こんにちは、と返した。

「ちようどよかった。私、北島さんにお聞きしたいことがあるんです」

「私に？」首を傾げた美和に、里紗はふんわりと微笑んで、はい、とうなずいた。

「柴田さんって、彼女いるんでしょうか」

あまりに唐突でしかもストレートな質問だったので面食らったが、すぐに気を取り直して逆に質問をした。

「どうして私に訊くの？」

「なんかそういうこと話していそうな気がしたんです。柴田さんと北島さんって姉(きょう)弟(だい)みたいに仲良さそうだから」

「そう見える？ でも残念ながら、柴田くんには彼女のことは聞いたこと無いなあ」

「そうですか」

里紗はうなずいて、礼儀正しく、ありがとうございます、と頭を下げた。

「気になるんだ」

「はい」

はっきりと物を言う子だな、と美和はびっくりする。ジェネレーションギャップなんだろうか。美和にはさして親しくもない相手を前にそんなことを素直に認める勇気はない。

「北島さん、これからもよろしく願います」里紗はにっこり笑って、先にその場を去っていった。

きめの細かい、白いきれいな肌をしていたのが印象的で、美和は無意識に鏡に視線を移した。口元にぽつんと赤い点が見える。今朝、メイクをする時に気付いたのだが、朝よりも少し大きくなっている気がする。

ちょっと油断して手入れを怠ったり、夜更かしや残業が続くと現れる吹き出物。最近こういったものができることが増え、しかも治るまでに時間がかかるようになった。

少しずつ少しずつ、私も年を重ねていく。いつまでも若いままじゃられない。どんなに嫌だと思っても、逃れられないことくらいわかっている。

「よろしくって言われても」一人つぶやく。

今のは、美和に対する牽制、もしくは敵情視察だったのだと思う。柴田さんと北島さんはそんな関係じゃないですよ、そう念を押したつもりなのだろう。直感でそう感じる。かわいい顔し

て結構こわい。

姉弟。年の差を考えれば確かにそう見えるのが自然だろう。頭の中でイメージしてみても、柴田と里紗が並ぶのが組合せとしては妥当だ。里紗のような女の子に好かれるのは男性なら誰だってうれしいはず。そう思いながらなぜか気分がどんどん重くなっていく。

七時半まで仕事をして、八時に敦子と【キャラバン】で待ち合わせた。

時折、敦子には靈感のようなものあって、自分の状態が見抜かれているのではないかと思う。気分的に下り坂の時に、絶妙なタイミングで電話をくれることがよくある。

顔を合わせて落ち込んでいることがわかって、敦子は自分から言わない限りそこには触れない。話すのは大抵、映画のこと、音楽のこと、最近あったおかしなこと、などだ。

今日の議題は《ラブ・アクチュアリー》で一番好きなシーンについて。

「ドラマがんばった男の子かわかったよね。あの子が空港で搭乗口に向かうシーンが好きだなー」

と美和が言うと、敦子は笑ってうなずき、

「私は、コリン・ファースがポルトガル語でプロポーズするところかな」

「うん。あのシーンもよかったよね」

美和も同意して、ソルティドッグのグラスに口をつけた。

しょっぱい。

自分でオーダーするくせにソルティドッグを飲むと決まってそうつぶやいて少し顔をしかめる美和を、当たり前でしょ、といつも千枝と敦子が笑う。今日も敦子が笑った。

敦子はあふれんばかりのパワーを分け与えてくれる千枝とはまったく別のアプローチで、美和を支えてくれる。傷ついていることを知らないふりして黙ってそばにいる、そういう気の使い方をする。

「私、サンディエゴに行くことにしたの」

不意の言葉に、美和は頭の中で、サンディエゴ、という言葉は何度も繰り返した。

「アメリカ？」

「うん。アメリカ。メキシコとの国境にあるところ」

「それは、旅行でってこと？」

「ううん」敦子は笑って首を振った。

「今の仕事でよく連絡をしていた会社の人が、こっちで働かないか、って誘ってくれて。向こうの旅行代理店の仕事」

「そう」

美和には海外で働くことなど考えてみたこともないので、どんな感じなのか想像もつかない。ただ、その決断はとても勇気のあることだと思えた。

「ビーチが近くて、暖かくていいところなんだ」

「じゃあ、遊びに行かないとね？」

「うん。是非来て」

敦子は長いこと同じ会社の既婚男性と付き合っていたはずだが、きっと別れることに決めたのだろう。

美和はあえて踏み込んで訊かなかったが、敦子のすっきりした横顔を見てそう思った。

敦子は先を見据えて着実に次のステップに進もうとしている。まだその前の段階で手探りをしている状態の美和にはそれがとても眩しく見えた。

目が覚めて、布団の中からはいつはい出そうかタイミングをはかっていたところで携帯が鳴った。土曜の朝から電話がかかってくるのは珍しい。

着信の名前を見ると、雅人だった。この前会ってから二週間もしないうちに電話してくるとは、一体何の用件なのだろう。

美和はベッドに仰向けになって、電話を耳に当てた。

「もしかして寝てた？」

「起きてた」

「月曜に東京支社で会議があってこれからそっちに行くんだけど、今夜食事でもどう？」

イエスと答えかけて、カーテンの隙間に目を向けた。明るい光が差し込んでいる。

「.....悪いけど、先約があって」

「そっか。じゃあまた今度」

電話を切って布団から這い出し、カーテンを開け放した。一気に部屋中に光がなだれ込む。

先約だなんて、嘘。ホントは何にもない。白紙の週末。

どうせ私ならいつでも捕まるとでも思っているに違いない。そんな男の暇つぶしのために自分の時間を割くのが急に惜しくなった。しばらく会わない方がいい。恋でも友情でもない消化不良の未練は、百害あって一利なしだ。

「私にだって都合ってものがあるんだから」

美和は窓を開けてベランダの洗濯機に洗濯物を放り込み、スイッチを入れた。今日は徹底的に洗濯と掃除をすることに決めたのだ。

余裕があったら前から気になっていた本棚の位置も変えてみよう。中身を出せば一人でも動かせる。

天井に目を向ければ、先日換えたばかりの新しい蛍光灯の白さが際立ってまぶしく見えた。

蛍光灯を換えるのも模様替えをするのも全て自分一人でやるのは当たり前なのだが、男手なしで何とか生活できてしまうのでは、どんどん縁遠くなるのも無理はないか、と美和は苦笑した。

青空に向かって洗い立てのタオルをぱんと広げながら、昨日、敦子が帰り際に言っていたことを思い出す。

「なんで千枝が『小犬ちゃん、って呼ぶのかわかる？』

「かわいいからでしょ？」

「美和の話を知りただけでも、彼が美和を好きだってわかるからだよ」

敦子は焦れた様子でそう種明かしをした。

「鈍い美和につれなくされても忠実にしっぽを振ってるからだって」

千枝の言いそうなことだ。

美和は洗濯バサミでタオルの端をとめながら、次に会う時も「小犬ちゃんは元気？」と尋ねるであろう千枝のいたずら好きな目を思い浮べる。

そう言われてみれば、確かに思い当たることはある。

仕事がうまくいくと嬉しそうに報告してきたり、子ども扱いされると不満そうな顔をしたり、わからないことをどんどん質問してきたり。その相手は依子や洋子ではなく、いつも美和だった。

でも……あんまり自惚れるのもどうかと思う。席が隣だったり、ずっと年上の依子や年下の洋子より話しかけやすいというだけの理由かもしれない。

ふと目線を落とすと、冬が来る前に鉢に植えたチューリップの葉の間に、いつの間にかつぼみが顔を出しているのに気がついた。

思わずしゃがみこんでよく観察する。固く小さなつぼみは、中心に赤を隠してまだ緑色に覆われていた。東向きの窓の下で朝日に当たって育つそのつぼみがいつ開くのかを考えただけでわくわくする。

洗濯物を干すのも、少し前まで寒くて億劫だったのに、今日は風が暖かくて楽しい気分になった。

「北島さん」

朝から中川と小原が中川の席でなにやら難しい顔をして低い声で話をしていたのだが、そこへ手招きされて、一体何事だろう、とあわてて駆けつけた。

中川が美和の目を見て、申し訳なさそうに、しかしはっきりとした口調で切り出した。

「北島さん、熊本に出張してもらえないか」

「えっ？」

「実は一課の吉村くんが昨日腹膜炎で入院してね。復帰まで二ヶ月かかるらしい」

吉村は美和と一番年の近い営業部員だ。営業部の中で最もシステムまわりの知識が豊富で、ちょうど今は自動車のエンジンを製造している工場に品質検査システムの提案を手がけていた。美和はその提案資料の作成を一ヶ月前から手伝っていた。

「横山技研の品質検査システムの資料は北島さんが作ってくれたそうだね」

「はい。でも、私は吉村さんの話を聞いて作っただけで……」

「明後日、先方の社長と工場の責任者に提案資料を見せて、デモンストレーションを行うことになっているんだよ。先方はかなり乗り気になっているし、こんな直前になってスケジュールを変えてもらうわけにもいかない。資料の内容とアプリケーションの操作を知っているのは北島さんだけだ」

小原が有無を言わさぬ口調で、困惑する美和に畳み掛けるように説明した。

「もちろん見積の提示やスケジュールの提案は小原くんがする。君はアプリケーションの説明とデモだけやってくれればいい。北島さんなら安心して任せられるよ」

中川は暗示でもかけるように美和の目を覗き込んで、ぼくを助けると思って頼むよ、とゆったりと微笑んだ。

明日の夜から熊本に一泊の出張が決まった。

前職を含めても、美和の職歴の中で最も遠い場所へのお出張だ。これまで行った出張の中で一番遠かったのは名古屋で、それも日帰りだった。宿泊出張は本当に初めてだ。

気付いた時には六階で残っているのは美和だけだった。周囲を見回してみるが、人の気配はまったくしない。しんと静まり返ったオフィスに、一人とり残されてしまった。

出張は明日の夜からだからまだ一日猶予はあるが、落ち着かなくて、不安で、何度も吉村と作った資料を見直した。資料を作るためにシステム開発部門の担当者から使い方を聞いたことがこんな展開につながるとは思ってもいなかった。

接待の席に駆り出されることはあっても、基本的に裏方の仕事しかしてこなかった。美和自身、それが自分に合っていると思ってきた。社内の会議に議事録を作るために同席することはあるが、顧客への企画提案の場に立ち会ったことはない。

吉村は提案どおりの内容で品質検査システムの導入が決まった場合の売上金額を一千二百万円と見積もっていた。そんな重要な取引を左右することを任せるなんて。

午後、北島さんだけが頼りだ、と吉村が病院から懇願の電話をかけてきた。事情はわかるが、君なら安心とか、君にしか頼めないとか、買いかぶりすぎだ。そんなふうに人に頼りにされると気が重くなる。どうして私なんだろう。一体みんな私の何を見てるの？

頑張っただけで認められて何かの役職につこうとか、独立して会社を起こそうとか、そんな野望を抱いているわけではない。本当のところ、日々の生活ができる程度のお金が稼げれば充分だと思っている。それなのに自分の能力を全て出し切って働こうとするから、こんなことになる。ある程度どこかでセーブするか何もできないふりでもしておけばよかった。

「エクセルの関数はわかりませんねえ。北島さんに訊いてみてください」

洋子の明るい声が耳に蘇る。面倒なことになると上手に身をかわすことのできる洋子の三分の一も要領がよかったら。自分の要領の悪さを呪いたくなる。損な役回りだ。

きゆうっと締め付けられるような痛みを感じて、美和は掌をお腹に当てた。

久しぶりに来た。緊張から来る腹痛だ。情けない。観客の前で舞台上に立って台詞を大声で叫ぶことを何年もしていたのに、会議室で何人かの人間を前に話すことを怖がるなんて。

神頼みの飴を口にして、大きく深呼吸をした。息を吐き出すのと同時に、鼻の付け根がつーんとする。

しゃくり上げる。頬に熱い筋が通る。

どうせ誰もいない。泣きたい時は泣けばいいんだ、と美和は開き直った。涙には浄化作用があって、心の中にあるイヤなものを流してくれる。今日は泣く、と決めたらとことん泣いてやるのだ。

こんなちっぽけな私に大仕事を任せるなんて、ホントにどうかしてる。

パソコンのハードディスクが低く唸る音がうるさく聞こえるほど、他に物音一つしない。

柴田は静寂と沈黙が苦手だ。

外回りで出かけた取引先で大学野球でピッチャーをやっていたという部長と話が盛り上がってしまい、食事までご馳走になった。本来なら直帰コースだったが、明日の朝、井上と行くことになっている会社の資料を取りに戻らなければならなかった。

九時半を過ぎている。もう誰もいないと思っていた。

ところが、蛍光灯は皓々と光っており、すぐにそこに美和の後姿を見つけることができた。パソコンのディスプレイを前に、頭を抱えてうつむいている。しかもその肩が規則的に大きく揺れている。

柴田はしばし入り口で逡巡したが、思い切ってどンドン中に入って行き、自分の椅子にどかりと腰を下ろした。

「どうしたんですか」

美和は人が来るとは思わなかったので驚いて顔を上げた。

すぐにそれが柴田だと気付いてあわててうつむき、引き出しからティッシュを出して頬を押さえた。

「ちょっとコンタクトの調子が悪くて」

「そうですか」

その答えが嘘であることなどわかりきっていた。しかし、一瞬顔を上げた美和の目が真っ赤で、本当に泣いていたとわかるとかえって、こんな風に泣くほどのこととは一体何なんだろう、と考え込んでしまう。

「明日、出張ですよ。早く帰らなくて大丈夫ですか」

資料を引き出しから取り出しながら何の気なしにそう言った瞬間、美和は両手で口を押さえた。伏せたまつげの下から涙がぼろぼろと流れ出す。

驚きのあまり二の句を継げずにいると、美和は吐き出すように言った。

「大丈夫なわけじゃないじゃない。無理だよ。私なんか何もできないのに」

美和がしゃくりあげるのを聞きながら、柴田はようやく理解した。木曜日の企画説明がプレッシャーとして重くのしかかっているのだ、と。

自分が初めてたくさんのお客様の前でプレゼンテーションをした時のことがよみがえる。空気すら重たく感じて、ばくばくする心臓が口から飛び出してしまいそうだった。何もかも放り出して帰ってしまいたいと思った。……もちろん逃げ出すことなどできなかったが。

いつもは自分を子ども扱いする美和が、小さな女の子のように泣きじゃくるのがいとおいしい。

「できるよ、北島さん」

柴田は思わず手を伸ばして、小刻みに震えている美和の頭の上に手を乗せた。

「私のこと何も知らないのに無責任なこと言わないで」

柴田の手は温かかった。誰より優しい気持ちで言ってくれた言葉を、本当は信じたいと思った

。なのに口をついて出たのはそんな言葉でしかなくて、美和は余計に悲しくなった。

「知ってるよ、ちゃんと見てたから。おれにパワーポイントとかエクセルを教えてくれるみたいにやればいいんだよ」

人間の手には力がある、って、ばあちゃんが言ってたっけ。柴田は突然そんなことを思い出した。

『手当て、って言うだろ。こうして手を当てると早く治るんだよ』頭にできたタンコブに祖母が柔らかい掌を置いて、言った。

そして実際に祖母にそうしてもらおうとどんな傷も早く治ったものだ。

この人がいつものように元気に笑えますように。柴田は心の底からそう願って掌に念じた。

「ダイジョウブ、絶対できる」

「バカみたいでしょ。付き合わせてごめんね、柴田くん」

会社の前のうどん屋で、遅い夕食の梅とじうどんを前に、美和は柴田に頭を下げた。

いつもは脳天気なくらい楽天的な性格だが、時折感情の波が押し寄せて涙が止まらなくなることがある。そんな時はひとしきり泣くと大抵我に返ってバカバカしくなる。

今日もそうだった。泣くだけ泣いたらすっきりして、何をそんなに悩むことがあるのだと思いはじめた。こうなったら後はできることをやるだけだ。

その変貌に柴田は呆気にとられたが、これこそ自分の知っている北島美和だ、と思いなおして、夕食に誘ったのだった。実のところ食事は既に済んでいたのだが、少しでも長く一緒にいたいと思った。

「おれでよければいくらでも付き合いますよ」

きつねうどんの揚げを二つ折りにしてぱくりと一口で食べてから柴田は本心からそう言った。

「柴田くんには助けられてばかりだね。甘えちゃってるなあ」

うどんをすすりながら、美和は額に残る柴田の手の感触を思い出す。

温かくて、力強い、柴田のパワーをめいっぱい充電してもらったみたいだ。根拠の無い自信ではあるが、今なら何でもできる気がする。

「もっと甘えてくれてもいいんだけど」ぼそっと柴田がつぶやく。

えっ？ と美和が聞き返したので、微笑んでごまかす。

美和は陽のあたる畳の上で膝を抱えてじっと爪先を見つめている。白い毛玉のついた赤い靴下。

髪を編みながら、母が話しかける。

「魔法のお薬も飲んだし、もうお腹痛くないよね？」

起きた時に大騒ぎした腹痛は、いつもの白い錠剤を飲んだ直後にとうに消えていた。

今日は初めての学芸会。一年生は《おやゆび姫》を演じる。主役に抜擢され、母に縫ってもらった衣装を着て舞台に立つのを楽しみに毎日稽古も頑張ってきたのに、いざ本番の朝になったら今まで感じたことのない恐怖に襲われた。

台詞を間違えたらどうしよう。みんなの前でつまずいて転んだらどうしよう。

朝になって、できない、今日は休む、と言い出した美和に服を着せ、母は言った。

「美和が休んだらみんなが困るよ。先生も、友達も」

わかっている。代役はいない。だから余計に怖いのだ。

「台詞を間違えたら言い直せばいい。誰も怒ったりしないから」

美和が顔を上げて母を見ると、母は笑うでもなく叱るでもなく、美和の目をじっと見て言い聞かせた。

「練習通りやればいいの。練習でできたことが今日できないわけないよ」

今朝、小学校一年の時の夢を見た。学芸会本番の日の朝の夢だった。

それは、記憶の海の底に沈めていたシーンを呼び覚ました。

カーテンコールで舞台の上から暗い客席に見つけた母の泣き笑い。8ミリを構える父。拍手の音。一緒に舞台に立ったクラスメイトたちの興奮で紅潮した頬。

あの劇は成功したのだ。だから演劇に興味を持った。本番前のつらさよりも終わった後の満足感の方が何倍も上回ったから、もう一度やりたいと思えた。

仕事を終えて東京に向かう飛行機の中で、美和は再びその記憶を噛みしめるように思い出した。

ヘッドホンから、《サウンド・オブ・ミュージック》の一曲が流れている。

Climb every mountain

Search high and low

Follow every byway

Every path you know

Climb every mountain

Ford every stream

Follow every rainbow

Till you find your dream

("Climb Every Mountain" 作詞 Oscar Hammerstein II)

全ての山に登りなさい

高い山も低い山も

知る限り全ての小道をたどりなさい

小川を渡り、全ての虹に向かいなさい

夢を見つけるまで

角の丸い小さな窓の外に目を向ければ、青以外に何も無い空が広がる。その下には、同じように白い雲の層が平行して続いている。果てしない青と白。他に何も無い。

広いなあ。

美和はつくづく思う。地上では建物に細かく区切られた空も、本当はこんなに広い。

横山技研の熊本工場で行った品質管理システムの説明は、何事もなく無事終了した。営業の現場経験のない美和でも明らかに手ごたえを感じることができた。社長と工場長が満足そうに顔を見合わせてうなずき合い、導入の方向で検討する、と告げた。

拍子抜けするくらい、簡単に、呆気なく済んでしまった。

『また来てください』入り口まで見送ってくれた、人のよさそうな工場長の言葉。決まりきった社交辞令であっても、大仕事を終えたばかりの美和にはとても嬉しく感じた。

全ての山に登れ。

いつも嫌なことから逃げようとしていた。面倒なことは嫌だし、傷つくのは怖い。恋でも仕事でも、「たぶん無理」と自分で限界を決めたらそれ以上のことはあきらめていた。でもそれって、なんてつまらないことなんだろう。やってみたら案外こんな風に簡単に飛び越えられることかもしれないのに。そのままでは狭い世界を守ることはできても、遠くには行けない。「きっとできる」って信じる方が人生楽しいに違いない。

目指すものが見つからないのなら、とにかく行ってみればいい。登る前にあきらめないで、やってみること。本当にその通りだ。

鼻先に手首を押し当ててみると、ミルクティーのように上品で控えめな甘さのラストノートがわずかに残っていた。

ほとんど毎日のように奇跡(ミラク)という名のこのオードトワレを好んで選ぶのは、香り自体が好きだけでなく、やはりどこか奇跡を期待しているからなのだろう。

レモンキャンディにしても、ミラクにしても、少し依存心が強すぎたようだ。これさえあれば大丈夫とか、イイコトがありそうだとか、恋の相手にめぐり逢えそうだとか。その力を過信して濫用していた。

奇跡なんかが毎日起こるはずがない。日常的に起こらないことを奇跡というのだから。これからはしばらくは封印しておくことにしよう。本当に特別な時に使うために。

小原とは二日間一緒に行動していたのに最低限の会話しか交わさなかった。今日も飛行機に乗るなり新聞を広げて、隣の席にいるのにまるで知らない乗客のようだった。その小原が、突然、ぼそりと言った。

「北島さんがいてくれて本当に助かったよ。急な話だったのにしっかりやってくれてありがとう」

美和が振り向くと、小原はいつもオフィスで柴田をからかう時のようにニヤリと笑った。

「吉村の営業手当は北島さんの給料に回してもらわないとな」

美和は、よろしくお願ひします、と小原の冗談に合わせて頭を下げ、二人で笑った。

「皆様、当機はまもなく着陸態勢に入ります。今一度シートベルトの着用をお確かめください」

アナウンスが羽田空港への着陸を予告した。

モノレールに乗るといふ小原と到着ロビーで別れて、美和はリムジンバスのチケットカウンターへ向かう。

家族の帰りを待つ人。訪問客を出迎える人。人待ち顔の人々で到着ロビーは混雑していた。ちょうど彼岸の連休前だからなのだろう。

美和に迎えの人間がいるはずはないのだが、いないと知っていても淋しい。

何をがっかりしてるんだろ、私。

美和は自分が何かを期待していたのに気付いて軽く頭を振る。

ところがその時、名前を呼ばれた気がして振り返った。

人波の向こうで、腕をまっすぐに上げて、左右に大きく振っている男性がいた。たくさんの人の中からその笑顔を瞬時に見つけた時、はっきりと自覚した。

今、一番会いたかったのは、柴田祐太だ。今日の成果を一番最初に伝えたい。

助け起こしてくれた腕の力。明るい気分になれる笑顔と、声。美和に力をくれた手の温もり。

きっとそこには何かがある。

静かに高鳴り出した胸の鼓動を充分に感じながら美和は思った。

千枝の言うとおりに、余計なことを考えすぎているのだと思う。大切なのは、与えられたチャンスを生かすこと。逃げないこと。

息を切らして柴田が走ってきた。

「お帰りなさい！」

「ただいま」美和は胸を張って答えた。

代々木の地中海料理の店で食事をするようになった。

柴田がドライバーに行き先を告げると、タクシーはゆっくりと夕闇に沈む街へ滑り出した。

「どうでした？」

「おかげ様でなんとか。購入の方向で検討するって」

「すごいじゃないですか。よかったですね」

柴田は自分のことのように喜んで、膝を叩いた。それが嬉しくて、美和は微笑んだ。

「おめでとうございます」

「まだ決まったわけじゃないけど」

少し弱気なことを言うと、柴田は、大丈夫ですよ、と請合った。

柴田の`大丈夫、には、不思議な力がある。

無責任に相槌を打つのもなく、安易に励まそうというのもなく、ちゃんと心強くしてくれる。

「柴田くんのおかげだよ」と美和はゆっくりと体をシートに預けて、軽く目を閉じた。

大丈夫。自分でも心の中でつぶやいた。今やっと全てから解放されたようだ。

目を開けると、美和が眠ったと思ったのか、柴田は窓の外に顔を向けていた。ヘッドライトやテールランプ、街の明かりが尾を引き線を描きながら流れていく。東京に帰ってきた、という実感が安堵感に変わり、体の芯から温かくなって急に心地よい眠気に襲われた。

そこに無防備に待ち構えていた（と美和は思った）柴田の肩にこみかみを押し当てた。

瞬間、柴田の体が硬直したのがわかる。彼の喉仏が目の前で大きく上下するのを見て、美和は頬を緩めた。

正光製薬の納品が決まったから以前からの約束を果たす、という誘い文句だったが、美和だってそれがただの口実だということを見抜けないほど鈍感ではない。

シートに投げ出されたままの大きな手の上にそうっと指を重ね、そ知らぬふりをして再び目を閉じる。

柴田の肩はまるで自分の頭がおさまるのを待っていたかのようにじっくり馴染んで居心地がよかった。このままずっとこうしていたい、と思うくらいに。

こんな風に誰かの前で無防備な自分をさらけ出せたのは久しぶりだった。

ぴかぴかに晴れたいい天気だ。陽にあたっているだけで幸せな気分になる。

絶好のお出かけ日和。天気予報ではそう表現していた。

柴田に誘われてドライブに出かけた。誰かの車の助手席に座るのは久しぶりだ。車を運転する柴田の横顔はいつもと違って見えた。紺色のパーカーにジーンズというカジュアルな服装を見るのが初めてだからかもしれない。

一番最初にいいなと思ったのは自分の歓迎会の時だった、と柴田は打明けた。

「幸せそうに食べる人だな、と思って」

「言ってたよね。食べてる時が一番幸せそうって」

「うん」

「私って、食べてばかりのイメージ？」

「そんなことはないけど」

柴田は笑った。

それにしても。さっきから美和はペットボトルの蓋に挑んでは連敗していた。喉が渴いているのに、お茶が飲めない。どうしてこう、この蓋というやつは頑固なんだろう。

「貸して」

その様子を横目で見ていた柴田がおかしそうに笑いながら、信号待ちの隙にひよいとペットボトルを取り上げた。美和がてこずっていたのが嘘のように、蓋は彼の手の中でいとも簡単に回り、軽く空気の抜ける音がした。

「はい」

「ありがとう」

たった今開いた蓋とボトルを手渡され、美和はそのまま掌に置いた小さな白い蓋をじっと見つめた。

「何？」

「ううん、なんでもない」

美和は首を振って、肩をすくめた。

「苦手なの。ペットボトルの蓋。握力弱いんだ」

「マジで？」

うん、とうなずき、美和はボトルに口をつけた。ようやく乾いた喉を潤した後、もう一度手の中のプラスチックの塊を眺めた。

何でも自分でやろうと頑張らなくていいんだなあ。

それは、とても幸福な実感だ。

今日は美和の三十回目の誕生日だった。

午前〇時になった瞬間に携帯に届いた敦子からのメール。直後に千枝は直接電話をかけてきて、ハッピーバースデーを歌った。朝には母がおめでどうの一言を言うために電話をくれた。窓辺

のチューリップまでもが朝日の中で祝福するように赤いつぼみをわずかに開いていた。

もう一度ペットボトルから一口お茶を飲んだ時、手首から花の香りがほのかに鼻をくすぐった。

プレミエジュール、はじまりの日。梔、スイートピー、蘭。やさしいイメージの花の香りが散りばめられている。

誕生日を迎える度に生まれ変わった気分になろう、と三十歳の自分に贈った。孤独に負けそうになったら、きっとこの香りで思い出さだろう。誕生日を忘れずに祝福してくれる人がいることの幸せを。どんな時も自分の味方と信じられる人たちがいることの心強さとありがたさを。

それに今年は、今日という日を一緒に過ごしてくれる人がいる。

実はまだ今日が何の日なのか、柴田に言いそびれていた。タイミングを見て切り出そう。

蓋を閉めたペットボトルをドリンクホルダーに入れると、運転席から手が伸びて、右手をそっと握られた。顔を上げると、アクセルを踏み込みながら、バックミラー越しに柴田の目が照れくさそうに笑っていた。

美和がニッコリして、あのね、と切り出した時、少し開けた窓から吹き込む風にかすかに潮の匂いが加わった。

【文中引用】

`GO TO THE TOP、 作詞 hitomi 作曲 Tetsuya Komuro

`桜の時、 作詞・作曲 aiko

`Climb Every Mountain、 作詞 Oscar Hammerstein II 作曲 Richard Rodgers

(2005.05.23)